九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

パスカルにおける「繊細の精神」

上田，富美子

https://doi.org/10.15017/70

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 3, pp.31-42, 1976-03-10. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

パスカルにおける「繊細の精神」

上　田　富美子

≪L'esprit de Finesse≫ de Pascal

Fumiko Ueda

はじめに

パスカルの「パンセ」(Pensées) が「繊細の精神」(esprit de finesse) についての考察を以てはじめられたことは，きわめて象徴的なことに思える。たとえ，その位置付けは彼の死後編者[1]によって与えられたものにもせよ，「繊細の精神」は文字通り彼の思想への関門を形成しているように思えるからである。ということは，「パンセ」全篇がパスカル自身のすぐれた「繊細の精神」の所産であるとともに，同時に我々自身もまた「繊細の精神」をもつことを要求され，その上ではじめて，パスカルの思想への接近は可能になるということを意味しているからである。してみると，「繊細の精神」は我々自身が鋭く吟味される検問の場でなくして何であろうか。ここに，比類のないパスカルの思想の特性は見出せる。このことは，おそらく，彼自身生きることの中で身を以て遭遇した人間の根本問題を，徹底して問い続けたことと無縁ではないだろう。彼にあっては，生の深まりがそのまま思想の深まりを意味した。彼の思想は単なる観念上のことにとどまらず，我々自身の実践へとつよく差し向けられていると言うことができよう。我々自身生きることの中で，パスカルの遭遇した問題に身を以てぶつかり，それを引き受け考え抜いて行くよりほか，彼の思想への接近の道はあり得ないのである。その点において，パスカルの思想は妥協のない厳しさをもつものである一方，ひとたび彼とともに歩むことを決意した者にとっては，この上ない慰めを与え得るものでもあろう。この「繊細の精神」についての小論が，そのような理解へと向うささやかな一階梯となることをねがって前置きとしたい。

「繊細の精神」(esprit de finesse) という言葉が明らかに見出せるのは，断章1[2]においてのみであり，この言葉は「幾何学の精神」(esprit de géométrie) に対して用いられている。従って「繊細の精神」が問題になる場合，そこでは同時に「幾何学の精神」も問題になっていると見なして差し支えない。そうすると，断章1は他のいくつかの断章と内容的関連をもつことになる。2，3，4の各断章が即ちそれである。というのは，これらの断章においては，「繊細の精神」という言葉はあからさまには使用されていないものの，いずれの場合も対比的な二つの精神機能が問題になっており，これらはそれぞれ内容的には1の「幾何学の精神」および「繊細の精神」に該当すると思われるからである。そこで，主要な断章1を中心としながら，2，3，4などの各断章を適宜補足することによって，「繊細の精神」についての考察をすすめて行きたい。

断章1は，「幾何学の精神」と「繊細の精神」との相違をその「原理」(principe) の相違によって説明することからはじめられている。その部分を引用すれば，「幾何学の精神においては原理 (principe) は明白(palpable) であるが，通常の使用 (usage commun) から遠ざかっている。従って，人はその方へ顔を向けようと思わない。習慣 (habitude) がないからだ。しかし，少しでもその方へ顔を向けるならば原理は

十分見える（voir）。人の目をのがれることのほとんど不可能なほどに大きい（gros）この原理の上で誤って推理しようとすれば，全く誤った精神をもつよりほかあるまい。しかし繊細の精神においては，原理は通常の使用のうちにあり，すべての人の目の前に（devant les yeux de tout le monde）ある。顔を向けることは要らない，努力することも要らない。ただ，よい目（bonne vue）をもつことだけが問題だ。がしかし，よい目はもたなければならない。なぜなら，原理はじつにこまかく（délié），またじつに数が多くて（en grand nombre），目をのがれずにいることはほとんど不可能なほどであるから。ところで原理が一つ欠けても人は誤謬に導かれる。だからあらゆる原理を見るためによく澄んだ（net）目をもつこと，それから既知の原理の上で誤って推理しないために正しい（just）精神をもつことが必要である。」

ここでは「目（視力）」（vue）や「見る」（voir）などの比喩的表現によって，きわめて暗示に富む内容が示唆されているが，そこに読み取れるのは，「幾何学の精神」および「繊細の精神」それぞれの「原理」の対照的特質であろう。即ち，「幾何学の精神」の「原理」は日常的使用のうちになく，従って人はそれを見ようともしないけれども，もし見ようと努力したなら，明らかで大きいこの「原理」は誰の目にも明確にとらえられるのに対して，「繊細の精神」の「原理」は日常的使用のうちに，即ちすべての人の目の前にあるため，努力してそれを見ようとする必要はないが，「原理」は微細で多数なので，「よい目」をもたない限りそれらは十分にとらえられないというのである。

ところで，注意されなければならないのは，上に引用した二つの「原理」の基本的特性についての表現のうち，「幾何学の精神」の場合には「見る」（voir）[3]という表現が与えられ，それに対し「繊細の精神」の場合には，この言葉にかわって「目（視力）」（vue）[4]という表現が与えられている点であろう。「見る」という行為には当然その対象が予想され，この場合それは「原理」と考えられるが，「目（視力）」という表現においては主体の側の能力が提示されているに過ぎない。ただし，「繊細の精神」の場合においても「原理」が「すべての人の目の前に」（devant les yeux de tout le monde）あると言われている点で，それは一見目の前に対象として立てられているもののように思われるかも知れない。しかしパスカル自身そのように考えていないことは，別の箇所で「繊細の事物」（chose de finesse）について語ったつぎのような言葉によって証明されよう。「人は繊細の事物の原理をほとんど見（voir）ない。人はそれらを見るというよりむしろ感ずる（sentir）。」（1）[5]（傍点筆者）つまりここでは幾何学の「原理」は主体の外に立てられ外在的であるのに対し，繊細の「原理」は主体の側にあり内在的であることが，「見る」（voir）に対する「感ずる」（sentir）という言葉で端的に示されている。人は自己の外にあるものを見るのでなく，内にあるものを感ずるのである。自己にとって全く外在的であればこそ，幾何学の「原理」には努力して目を向けるということがともなうのであり，自己のうちにあり自己の一部であればこそ，繊細の「原理」の行使に努力は要らないのである。またこのように見る限り，幾何学の「原理」は自己の外にある対象としてきわめて明確であるのに対し，繊細の「原理」は自己のうちに働くものとしてきわめて微妙で，それらが完全に行使されるためには極度の緊張と注意が必要になる。そしてこのことが，さきに「幾何学の精神」の「原理」は「明白」（palpable）で，「大きい」（gros）と言われたことの，そして「繊細の精神」の「原理」は「こまかく」（délié），「数が多い」（en grand nombre）と規定されたことの意味であろう。パスカルはまた，「繊細の精神」の場合について，「精神はそれを黙って（tacitement），自然に（naturellement），そして方式なしに（sans art）おこなう。なぜならその表現（expression）は万人の力を越え（passer），その感知（sentiment）はわずかの人にしか許されていないからである。」（1）と言っているが，これはこの精神の精妙な作用をたくみに表現したものであるとともに，その「原理」の主体的能力との緊密な結びつきを示唆して余りあるのではないだろうか。

してみると等しく「原理」という言葉は使用されているものの，「幾何学の精神」の場合と「繊細の精神」の場合とではその内容は全く異なり，厳密には同一用語の使用は適当でないとさえ言えるのではあるまいか。パスカル自身，断章1の叙述においてさえ暗黙のうちにそれに気付いていたと見えて，1の後半の部分では「幾何学の精神」だけに「原理」という言葉を該当せしめているし，断章3においてはさらに一歩すすめて，これを「幾何学の精神」だけに明確に帰属せしめている。つまり「原理」は，パスカルにおいても究極的には「幾何学の精神」だけに該当するものと見なされているのである。では「幾何学の精神」における「原理」とはどのようなものであろうか。「幾何学の精神」の「原理」について考察することは，この精神自身について考察することにつながるのは言うまでもない。

「原理」(principe)という言葉は，「推理」(raisonnement) ないし「推理する」(raisonner) という言葉とともに使用されている。断章1において，「推理の歩み (progrès de raisonnement) によって」は「まず定義 (définition) からつづいて原理 (principe) から」に相当するものと見なされているし，断章3においては「推理」と「原理」はほとんど一対の言葉として使用され，その密接な関係がはっきり示されている。例えば，「原理によって推理する (raisonner par principes)。」がそうである。[6] ところで「推理の歩みによって」という言葉は，「幾何学的に」(géométriguement)(1) ないし「幾何学の秩序によって」(par ordre en géométrie)(1)と言い換えられている点に注意を要する。つまり，「推理」作用こそ「幾何学の精神」を指すものと言うことができる。「幾何学の精神」とは「定義」(définition)と「原理」(principe)を経て秩序正しく働く推理機能を意味する。この精神の基本は「順序」(ordre) に従った段階的過程にあり，その過程の重要な一項を形成するものが「原理」であると言うことができる。従って「原理」は推理機能としての「幾何学の精神」の一つの明確な表現形態であり，その意味で両者は密接不可分な関係をもつ。そして「原理」はこのような推理作用との密接な結びつきの結果として，当然具体的事物を離れたところに，それも推理の鎖を経れば経るほど遠く位置付けられることになる。パスカルの言葉を借りれば，「思弁的構想的事物」(chose spéculative et d'imagination) (1)の中へと。そしてこのことが断章1の冒頭の言葉，即ち「幾何学の精神において原理は……通常の使用から遠ざかっている (éloigné de l'usage commun)。従って，人はその方へ顔を向けようと思わない。習慣がない (manquer d'habitude) からだ。」(傍点筆者) を裏付けるものである。

ではやはり同じ箇所で，「幾何学の精神」の「原理」は「明白」(palpable)で「大きい」(gros)と言われたことについてはどうであろうか。このことに関しては，それが「見る」(voir) という行為の対象として我々の外側に立てられていることから，そのような規定が可能になったのではないかとすでに触れたが，この点についてここでさらにくわしく考察してみたい。その手がかりとして，「幾何学者たち」(géomètres) は「その原理をよく見よく使いこなした後で推理する。」(1)という言葉が見出せる。この言葉は，幾何学の「原理」の反復可能性の指摘にほかならないと言えよう。人間共通の推理の歩みは誰が幾度たどるにしても同一であり，その主要な一階梯の命題化たる「原理」(これをパスカルは「幾何学の精神」の「原理」と呼んだが) もまた万人共通の普遍的原理として立てられることになる。つまりそれは人間の推理過程の一項でありながら客観性をもち，我々一人一人を越えた向う側に位置付けられることになる。かくしてそれは比喩的にではあるものの，我々の「見る」という行為の対象として我々の外に立てられるとともに，推理過程の主要な一段階の明示として，それをめぐる群小の諸段階に対し「大」という特質をもつことになり，また客観的明示という点では「明白」という特質を付与されることになるのである。

ではそれに対し，「繊細の精神」の場合はど

うであろうか。その「原理」については，内在的で主体の側の働きと切り離し難いこと，従ってそれは「幾何学の精神」の「原理」のように外側に明確に掲げられるものではなく，本来「原理」という名に相当しないものであろうことがすでに示唆された。この点を明確にするためには「繊細の精神」そのものが考察される必要がある。断章1で「繊細の精神」を端的に表現した言葉は「一目で一撃に」(tout d'un coup…… d'un seul regard) であろう。[7] これは「推理の歩み」(progrès de raisonnement)という言葉と対比的に提示されており，「定義」から「原理」へというふうに段階を追って展開される「推理」作用と全く対照的な精神の働きを示している。ここで特徴的なことは直接性ということであり，その意味で推理作用として間接性をその特色とする「幾何学の精神」に対して，「繊細の精神」の対照的性格が際立たせられている。このような「繊細の精神」の特性から直ちに想起されるのは，「直観」(intuition)という言葉ではないだろうか。しかしパスカル自身は≪intuition≫という言葉を使用せず，かわりに≪sentiment≫という言葉を用いていることは注目にあたいする。(断章1および3参照) だがこの点については後にあらためて触れることにしたい。≪sentiment≫はまた，さきに繊細の「原理」について「人はそれらを見るというよりむしろ感ずる (sentir)。」と言われたことと密接に関連する。ところで≪sentiment≫は飜訳困難な言葉であるが，一応「直感」と訳して置きたい。

「幾何学の精神」が「推理」(raisonnement) を意味するのに対して，「繊細の精神」が「直感」(sentiment)をその本性とするとすると，この精神はとりわけ個々の具体的事物や事態にかかわるであろうことが予測される。そのことは実際，断章1における「繊細の事物」(chose de finesse) あるいは「繊細な事物」(chose fine) (傍点筆者) という表現によって裏付けられる。この断章で「事物」(chose) という言葉が使用されているのは「繊細の精神」に関してだけであり，「幾何学の精神」についてはそのような事例は全然見出されないことは注目されてよい。その部分を引用すれば，「幾何学者たちは幾何学の明らかで大きな原理に慣れてい，その原理をよく見，よく使いこなした後でのみ推理することに慣れているので，原理がそのように使いこなせない繊細の事物 (chose de finesse) においては途方にくれる。」(傍点筆者) また「幾何学者たちは繊細な事物 (chose fine) を幾何学的に取り扱おうとする。」(傍点筆者) など。

この点についての一そう明確な裏付けは断章2に見出せる。断章2では「幾何学の精神」(esprit de géométrie)という言葉は確かに使用されているものの，それに対する「繊細の精神」という言葉はどこにも見当らない。しかしながら，これにかわるものとして「感覚の正しさ」(droiture de sens)，ないし「精神の正しさ」(droiture d'esprit) をその特性とする「正確の精神」(esprit de justesse) という表現が見出せる。この言葉がただちに断章1にいわゆる「繊細の精神」に相当すると即断することはできないかも知れない。しかしこれらの特性によって示されているものは[8]，明らかに「幾何学の精神」に対立するものであり，その点において，表現上の相違こそあれ「繊細の精神」との密接な関連は予測できる。また，この断章の内容自体からしてもそのことは十分肯定できるように思える。

ところで，この断章においても断章1の場合と同様「原理」が主要な論点となっているものの，ここでは「原理」についての規定に断章1の場合と大きな相違が見られる点が留意されなければならない。即ち，ここでは「幾何学の精神」の側には「多数の原理」(un grand nombre de principes) が含まれるのに対し，「正確の精神」の側には「わずかの原理」(peu de principes) しか容認されていない点である。ところが断章1においては逆に，「繊細の精神」の場合に「多数」(en grand nombre) の「原理」が認められていたのである。この一見矛盾する見解をどのように理解すればよいのだろうか。そのためにはまず断章2そのものの内容が検討されなければならない。2において「わずかの原理」をもつものの具体例として「水」(eau) があげ

られている点は着目にあたいする。その部分を引用すると，「例えば或る人々は水の諸作用(effets de l'eau) をよく理解する。そこにはわずかの原理 (peu de principes) しかない。しかしその帰結(consequences)は，精神の極度の正しさ (extrême droiture de l'esprit) だけが届き得るはなはだ微妙な(fin) ものだ。」この主張の要点は,「水」という一つの具体的事象から「精神の正しさ」によって豊かな結論が得られるということであろう。この場合「作用」(effets) と「帰結」(consequences)という二語は対応する。これらは原語的にほとんど同様な意味内容をもち，しかもいずれも複数で表現されている点は注目にあたいする。そうすると,「わずかの原理」に相当するのはこの場合「水」自体ということになろう。上の叙述の脈絡からしてそうならざるを得ない。従ってここにいわゆる「原理」は具体的事物そのものを指すことになり，さきに繊細の「事物」という表現がとられたことの理由もまたここで一そう明らかとなる。つまり「繊細の精神」においては正確には「原理」が問題なのではなく,「事物」自体が問題であると見ることができよう。またそこから，この精神に「わずかの原理」しか容認されていないことの理由も判明になる。というのは,「原理」が個々の事物を指すとするならば，その「原理」の小数性は当然帰結することになるだろうからである。そして実際，断章2においては「水」という一つの具体的事例があげられている。ここからして「繊細の精神」は個々の具体的事物に精妙に働くことによって，そこから多くの豊かな結論を導き出す作用と規定することができる。ところで，事物の側にでなく，反対にこのような事物に働く「繊細の精神」の精妙な作用の側に着目して，その作用の無数の微妙な過程を「原理」と名付けるならば,「原理」は逆に断章1におけるように「多数」と規定されることになろう。つまり,「原理」を「繊細の精神」の作用の側に認めるか，その対象たる個々の具体的事物の側に認めるかによってその規定は全く相違することになる。そしてこのことが，パスカルに「原理」という言葉を究極的には「幾何学の精神」だけに承認せしめたことの理由でもあろう。

以上より,「繊細の精神」は「直感」(sentiment) として，直接具体的事物にかかわることが明らかになった。ところで,この精神の「感覚」(sens) ないし「直感」(sentiment)への密接な連関が指摘される場合，ややもするとこの精神の恣意性や不確実性が予想されるかも知れない。このような予想は「感性」を下級能力と見なす伝統に由来すると思われるが，パスカルの場合その点全く違った立場がとられている。すでに見たように，パスカルにおいては,「繊細の精神」を「幾何学の精神」からその対照的特質によって際立たせるという手法が用いられていた。そのことは，さきに引用した断章1の冒頭の部分においてもすでに明らかであるが，そればかりでなく断章1はその後の部分もすべて，幾何学者たちと繊細な人々の属する領域の明確な区別に当てられていると言ってよい。このようなパスカルの態度が示すものは,「繊細の精神」と「幾何学の精神」とはその性格を根本的に異にし,同列に談じることは不可能であり，資格を異にするものとして対等に位置付けられねばならないということであろう。このような態度にはすでに，この精神に対する恣意性や不確実性の容認とは逆の立場がうかがえる。そしてそれは実際，パスカルが「繊細の精神」に「直感」(sentiment) とともに「判断(力)」(jugement) という規定を与えていることから一そう明確になろう。

パスカルは断章1において「繊細の事物」(chose de finesse)について,「それらの事物は,かくも微妙(délicate) でまたじつに数多い (nombreuse)ものであるから,それらを感じ (sentir) その感じ (sentiment)[9] に従って正しく正確に判断する (juger droit et juste) ためには，十分微妙で十分澄んだ感覚(sens bien délicat et bien net) が必要である。」(傍点筆者)と言っており，また断章3には「直感によって判断する (juger par le sentiment)。」という表現が見られ，さらに断章4では「繊細 (finesse) は判断 (jugement)の側にある。」と言われている。これらすべてから明らかになることは,「繊細の

精神」は単に「直感」(sentiment) だけでなく「判断(力)」(jugement) も必要とすること，これら両者がともに機能することによって「繊細の精神」は完全に展開されるということであろう。しかも「判断すること」(juger)には，上述のように「正しく正確に」(droit et just) という形容が当然付随するのである。さきに見たように，「繊細の精神」は確かに「黙って (tacitement)，自然に (naturellement)，そして方式なしに (sans art)」(1)働く人知を越えた精妙な作用であるかも知れない。しかしそうだからと言って，それは実際に「方式なしに」働くわけではないのである。それは，「幾何学の精神」の場合のように誰の目にも明らかな推理過程をたどるというかたちではないにせよ，個々の具体的事物を介してやはり「正しい」帰結をもたらすことができるのである。

この点に関しては，もう一度断章2が顧慮される必要がある。この章こそ「繊細の精神」に相当する精神機能が，個々の事物を通して豊かな帰結をもたらすことが明確に規定されている章であったのだから。ここでパスカルは，この精神を「わずかの原理を根底まで見抜く (pénétrer peu de principes jusqu'au fond)」ものと規定している。また「原理の帰結を活発に (vivement) 深く (profondément) 見抜く」とも言い，このような働きを「感覚の正しさ」(droiture de sens) 或いは「精神の正しさ」(droiture d'esprit) と呼んでいる。ただし，この場合「原理」は具体的事物を指すことはさきに見た通りである。ここではまた，この精神の働きに対して「強く狭い」(fort et étroit) という形容も与えられている。これらすべてを通じて明らかになることは，「繊細の精神」は「直感」に基づく「判断力」(jugement) として，個々の具体的事物という限定された局面において，そのものを深く洞察することにより正しい帰結を導き出す精神作用ということである。それは深まりによって「正しさ」を増すという点で，推理過程の広がりの中に位置付けられることによって，客観的に検証できる「幾何学の精神」の「正しさ」とは異質のものであるにせよ，やはりその「正しさ」を承認されなければならないのである。

さらにまたこの点に関しては，断章1におけるパスカルの「推理」という言葉に対する不正確な使用のうちにその消極的裏付けを得ることができる。すでに見たように，断章1には用語の使用について曖昧な点がいくつか見出せるが，「推理」についても同様である。彼はそこで本来「幾何学の精神」だけに適合するはずの「推理」(raisonnement) ないし「推理する」(raisonner) という言葉を，「繊細の精神」の場合にも使用している。例えば「繊細の精神」の場合，「既知の原理の上で誤って推理し (raisonner) ないために正確な精神 (esprit just) をもつことが必要である。」(傍点筆者) と言われているし，また「幾何学者たちは繊細な事物 (chose fine) を幾何学的に取り扱おうとし，まず定義からつづいて原理から取りかかろうとして自分を笑いものにする。そういうやり方はこの種の推理 (raisonnement) においてはしてはならないことである。」(傍点筆者) とも言われている。これらの場合にいわゆる「推理」は，「まず定義からつづいて原理から」と規定された「幾何学の精神」に典型的な「推理」とは全く相違していることが，特に後の引用の場合に明らかであろう。もしこれらの場合により正確な用語を適用するとすれば，「判断」(jugement) ないし「判断する」(juger) という言葉が最も適切ではないだろうか。だがともかくこのような事態が生じたのは，論述の端緒に往々起りがちな語法の未熟さとともに，パスカルのうちに無意識に働いた「繊細の精神」への一種の秩序の容認がしからしめたのではないかと思われる。さきに見たように，「推理」の本質はその秩序正しい思考方式にこそあったのだから。ここにもまた，消極的かたちであるにもせよ，「繊細の精神」に何らかの秩序を認めようとするパスカルの姿勢を見出すことができよう。

以上主として断章1，2，3を中心にパスカルの「繊細の精神」について考察をすすめてきたが，これらの断章を通じて顕著に示されたのはこの精神と「幾何学の精神」との対照的性格である。即ち「幾何学の精神」が「推理」の秩序

正しい段階を経て「思弁的構想的事物」の領域へ向うのに対して,「繊細の精神」は「直感」とそれに基づく「判断」で以て直接個々の具体的事物にかかわる。各々の精神はそれぞれの「正しさ」をもつが,その内容は全く異なっている。つまり「幾何学の精神」の場合は，推理過程の段階を経ることによる観念の広がり[10]の中にその「正しさ」は認められ,「繊細の精神」の場合は，それに対し具体的事物への精神の深まりによってその「正しさ」は保証される。ところで，前者において我々の推理機能によって形成された観念，即ちパスカルのいわゆる「思弁的構想的事物」が我々の外に立てられ，それを「見る」（voir）ためには努力を要すること，それに対し後者においては逆に外在的事物が契機でありながら,我々自身換言すれば我々自身の「目（視力)」が問題になってくること，こうした事情については多少触れた点もあるが，それ自体一つの大問題であるということができよう。だがこの点についての論及はひとまずさし置かざるを得ない。

ところで，ここにもう一度確認されなければならないのは，これらの断章に見られる論述の調子は二つの精神の対照的性格を示していることは勿論であるが，なおそれ以上のものをも示している点であろう。例えば,断章1においては同一人物が二つの精神を兼ね備えることの困難性が何度も指摘されており，断章2ではさらにすすんで,これら「二種類の精神」(deux sortes d'esprits) に関して「一は他なくしてあり得る。」という表現がとられている。断章3ではもっと明確に，二つの対照的精神をもった二種類の人間が存在するかのような表現が見出せる。これらはすべて，二つの精神の対照的性格の指摘から一歩すすめて，両者の相容れない性格の指摘であり，混同されようもない明確な区別の強調であろう。ここにおいて二つの精神は全く対等な資格で併置されているのである。この点は銘記されなければならない。

ではパスカルにおいて，これら二つの精神は融和し難い対立の中に常に放置されたままなのであろうか。両者の明確な区別は両者の関連を絶対に拒否するものであろうか。パスカルがかならずしもそのように考えていなかったことについては，断章282が参照されなければならない。ここでは「幾何学の精神」と「繊細の精神」にかわって「理性」(raison) と「心情」(cœur) という言葉が使用されているが，これらをそれぞれの精神に適合することはそれほど困難ではあるまい。なぜなら,ここでは「理性」は「証明する」(démontrer) と「推理」(raisonnement) という言葉で規定され,「心情」は「感じる」(sentir) と「直感」(sentiment) という言葉で規定されているのであるから。そしてこれらの規定がそのまま,「幾何学の精神」と「繊細の精神」に適合することについてはすでに見たところである。以上の前提をうけてこの断章に接すると，そこにはきわめて注目すべき見解が見出せる。この断章はまず「我々が真理 (vérité) を知る (connaitre) のは，理性 (raison) によってのみならず，心情 (cœur) によってである。我々が第一原理 (les premiers principes) を知るのは後の仕方によってである。推理 (raisonnement)は何らそれにあずかっておらず,それを反駁しようとこころみても無益である。」という言葉ではじめられ,つづいて「空間(espace)，時間(temps)，運動(mouvement)，数(nombre)があるというような第一原理 (les premiers principes)の認識は，我々の推理 (raisonnement)が我々に与える認識のいかなるものにくらべても同様に確実(ferme)である。これら心情 (cœur) と本能(instinct)の認識の上にこそ理性(raison)はよりどころを求む(s'appuyer)べきであり,そのすべての推論の基礎を置く(fonder)べきである。」と言われている。そしてすぐひきつづき，「心情 (cœur)は空間に三次元 (trois dimensions)があることを感じ(sentir)，数は無限 (infini) であることを感ずる。ついで理性(raison)は一方が他方の二倍であるような平方数(nombre carré)はないことを証明する(démontrer)。原理(principe) が感ぜられ (se sentir)，命題 (proposition) が結論される (se conclure)。」と述べられている。[11] これらの見解を通じて示されているのは「理性」と「心情」との，従っ

て「幾何学の精神」と「繊細の精神」との関係であり，これらはそれぞれ全く異なった性格をもつものでありながら，何らかの関連を有することが示唆されている。その関係とは即ち，「心情」が「理性」に対し基礎的な位置を占めることであり，両者ともに「真理」の認識に不可欠な能力であるものの，先立つ「第一原理」を与えるのは常に「心情」の側であり，「理性」はこの前提をうけてはじめて機能するものに過ぎないということである。即ちこの断章は，「推理」作用としての「幾何学の精神」に対する「直感」としての「繊細の精神」の基礎的性格を明示したものと受け取ることができる。

ところで，以上の前提に立ってつぎに断章4に視点が移されなければならない。さきに見たように，1から3までの断章は，「幾何学の精神」と「繊細の精神」の対照的性格の提示と，その明確な区別による対等な位置付けであり，それに対し断章282は両者の区別を承認した上で「繊細の精神」に基礎的位置を認めたものであった。これら各断章に見られるパスカルの態度は，従って何らの価値判断を示すものではなく客観的態度に終始している。ただし，さきに述べたように二つの精神を対等に位置付けること自身何らかの価値判断につながると見ること，また「繊細の精神」に基礎的地位を承認することはなおさら何らかの価値判断を与えるものと考えること，これらのことは一応別問題とするとして，明らかな価値判断が示されているのは断章4においてだけである。「真の雄弁は雄弁を軽蔑する。」という言葉ではじまるこの短い断章において，「真」(vrai)の資格を与えるものは「判断」(jugement)であるとされ，しかも「直感」(sentiment)と「繊細」(finesse)は「判断」に属する。それに対し軽蔑される側は「精神」(esprit)であり，これには「学問」(science)，「幾何学」(géométrie)が属する。そしてこの断章は，「哲学(philosophie)を軽蔑すること，それが真に哲学すること(vraiment philosopher) である。」という言葉でしめくくられている。そこで，先立つ断章を前提した上でこの断章を考察すると，いゆわる一般的意味での学中の学たる「哲学」は「幾何学の精神」に帰属する代表的なもので，「真の哲学」の根拠はそこにはなく，「繊細の精神」の側にこそ求められなければならないということになろう。しかもここではもっと積極的に，「幾何学の精神」に基づくいわゆる「哲学」が軽蔑されなければならないと主張されている。してみると，ここに見られるのは「繊細の精神」に対する全面的評価であろう。しかもこの断章4が先立つ断章をうけてのものとすると，これらの断章における二つの精神の明確な区別から，ここでの「繊細の精神」に対する一方的評価は二者択一的に，他方の即ち「幾何学の精神」の完全無視にさらには全面的否定につながると考えられるかも知れない。確かに，この断章から伝わる基調はそれに近いものを思わせないでもない。しかしながら，断章282を考慮に入れる限り，それはパスカルの真意にそうものと思えない。なぜならそこではさきに見たように，「幾何学の精神」にも「繊細の精神」にもともに「真理」は属すると考えられていたのだから。従って，この断章の主意は「繊細の精神」の一方的評価と「幾何学の精神」の一方的否定にあるのではなく，「繊細の精神」の基礎的位置からする重要性を訴えることにあったと見なす方が適当であろう。つまり，基礎的なものを無視したところに築かれるあらゆる学問は，特に「哲学」は「真」(vrai) の学の名にあたいしないと見るパスカルの考え方が，一つの昂揚したかたちをとって示されたものと考えることができよう。またこの断章には，「幾何学の精神」は「幾何学」だけでなく他のあらゆる「学問」を代表する精神であり，その意味で「学」の精神と呼ばれて差し支えないものであることが示されている点は注目にあたいする。

以上断章282，断章4を通じてさらに明らかになった点をまとめると，直感的判断によって具体的事物にかかわる「繊細の精神」は第一義的なものであり，これなくしては推理作用によって観念の拡大をはかる学の精神たる「幾何学の精神」も成立し得ない。その意味で学問がその上に基礎を置く「繊細の精神」こそ，もっと着目され重視される必要があるのではなかろうか。

もしこれが無視されるならば，学問はその成立根拠を失い無意味なものとならざるを得ない。これが断章282および4を通じてのパスカルの主張の基本であろう。だが一方，このような二つの精神の連関についての発言とともに，これらの併行的対立についての言及があったことも念頭に置かれねばなるまい。

以上，パスカルの叙述方式に従い，主として「幾何学の精神」との対比において，「繊細の精神」についての考察はすすめられて来たが，我々の目下の主題は言うまでもなく「繊細の精神」にあり，従って最後にこの精神そのものについての考察が深められる必要がある。この点に関しては，「繊細の精神」が「直感」(sentiment)と規定されたことが重要な手がかりを与えてくれるように思える。そこで以下「直感」を手がかりとしながら，「繊細の精神」自身を問題にして行きたい。すでに見たように，「繊細の精神」は個々の具体的事物に直接かかわるものと考えられた。その点において，この精神と「感覚」(sens)とのつながりは当然予想されるところであり，そのことは実際パスカル自身の言葉によっても十分裏付けられる。例えば，「繊細の事物」(chose de finesse)の把握に関して，「十分微妙で十分澄んだ感覚」(sens bien délicat et bien net)(1)(傍点筆者)をもたねばならないと言われたことがそうであるし，また「繊細の精神」の特性として「感覚の正しさ」(droiture de sens)(2)(傍点筆者)が認められている点もそうである。しかしながら，パスカルのいわゆる「感覚」が単なる感覚器官のみへの依存を意味していないことは，「直感」(sentiment)という言葉に一そう明確に裏付けられる。確かに「直感」にしても我々と事物との直接的関係の局面にかかわる以上，感覚器官と無関係ではあり得ない。しかし「直感」という言葉にはそれ以上のことが示されているように思える。即ち「直感」は「感情」(sentiment)をも含めたより広い領域を指向しているから。この点に関しては，「繊細の精神」にかわって用いられた「心情」(cœur)という言葉についても同様のことが言える。これらの言葉によって示されるのは部分としての人間の事物への関係ではなくて，人間がその全体で以て事物に関係することではないだろうか。即ち，人間が単に人間の一部に過ぎない感覚器官だけで事物に接することではなく，人間が人間そのものとしてそのすべてを以て事物に対することが意味されているのではあるまいか。パスカルが特に「直感」(sentiment)という言葉で以て示そうとしたのは，そのような人間全体での事物への直接的接触であったように思える。そうするとここにいわゆる「事物」(chose)はむしろ，人間に対置された「他の存在者」即ち「他者」≪l'autre≫と見なす方が適当であろう。なぜなら，それは一人の人間がそのすべてを以て対する相手なだかのら，彼とは全く別個な他の存在者を指すよりほかないからである。ここから逆に人間の側にはこの場合，「自己」≪le soi≫という規定が与えられることになる。従って，「直感」(sentiment)という言葉の開く地平は，単なる認識主体とその対象との直接的関係の地平にとどまらず，個別的特殊的存在者としての「自己」と，同じく個別的特殊的存在者としての「他者」との関係の地平であると言うことができよう。[12] この点はきわめて注目すべきことのように思える。そしてまた，このような二つの存在者の直接的接触の局面において生じる我々の側の規定が，「直感」であり「繊細の精神」であると言うことができる。そこでつぎに，これら両者間の関係についての理解が深められる必要があろう。

人は他の存在者にそのすべてを以てじかにぶつかることによって，それを「深く」(profondément)「根底まで見抜く」(pénétrer jusqu'au fond)というかたちでとらえる。(断章2参照)ここにいわゆる「深く根底まで」という表現は一体何を指しているのだろうか。それはおそらく，比喩的な言い方ではあるが，特殊的個物という「狭い」(étroit)入口を通ってそのものの内部にはいり込み，そのものの隅々まで滲透し尽すことによってそのものを把握する仕方を指すであろう。このような把握のかたちはまさに「繊細」(finesse)の名に相当し，そこに「繊細の精神」という呼び名が基づく所以があろう。する

と「繊細の精神」が目指すものは，「自己」と「他者」との内的な完全な一致である。そこに「幾何学の精神」の場合とは全く別な「真理性」(vérité) の保証があり，「繊細の精神」にもまた深まりの度合において「確実さ」が容認される根拠があると言える。

だがここでもう一度顧みられなければならないのは，このような事態を可能にする前提条件である。それは即ち，人がそのすべてを以て他の存在者にぶつかることであった。ここにいわゆる「すべて」とは何を意味するのだろうか。それは「我々のすべて」即ち「自己のすべて」ということであり，「自己のすべて」とはその能力と深く結びつき，その全能力の十全な開発を抜きにしてはあり得ない。人間の場合，その「すべて」ははじめから不変なものとして与えられているわけではなく，みずからの能力を十分に発揮するための絶えざる努力に支えられてこそそのことは可能なのである。パスカルが「繊細の精神」の場合「よい目」(bonne vue)が問題であるとし，「よい目はもたなければならない。」(1)と言っているのもこのような事情に発している。「よい目」ははじめから「よい目」として与えられているのではなくて，「もたなければならない (falloir)」(傍点筆者) のである。つまりこのような態度に支えられ我々の全能力が発揮された時はじめて，他の存在者もその全容を我々の前にあきらかにするのである。

ところで，前述のように，我々について「そのすべてを以て」と言われる時，その「すべて」とは自己の全能力の陶冶を意味した。全能力の陶冶とは，別の表現で示せば自己自身への「深まり」ということでもあろう。そうするとさきに見た他者への「深まり」は，実はほかならぬ我々自身への「深まり」によって裏付けられることになる。換言すれば，「自己」自身への深まりが，同時に「他者」への深まりを意味すると言えよう。ここに見出せるのは「自己」と「他者」との完全な相即であり，またそれならば，逆に「他者」への深まりが「自己」への深まりにつながると言うこともできる。してみると，「自己」と「他者」とは相対立するようでいながら即応するものであり，それぞれがそれぞれ自身に深まり，完全にそれぞれ自身となることによって完全に照応するものと言えよう。

ところで，このような「自己」と「他者」との照応という関係，即ち二つの存在者が全く別個のものでありながらかかわり合うということは人知を越えた事柄であり，その点これは確かに精妙としか表現しようのないものでもあろう。だが一方それはまた，我々人間に懸けられた「事実」≪fait≫でもある。我々人間のすべてのことは，この関係の中ではじまり，この関係の中でおこなわれる。この関係はまた，人間が他者との対応の中で他者そのものを知るとともに自己自身になる過程にかかわる。即ちそれは人間形成の過程そのものを示すとともに，他者を他者として認めて行く過程をも示している。この場合「他者」に対する「自己」とは分断されない，知性・感情・意志などすべての機能が統合された人間そのものを指すことは言うまでもない。してみると，この関係は人間が人間自身として生きることそのことを指してはいないだろうか。この基盤の上でこそ分化された人間の諸活動（例えば学問）は可能なのであり，それらはここを離れてあり得ないし，またあり得たとしても最早人間にとって無縁なものであろう。そこにパスカルが「繊細の精神」を第一義的，基礎的なものと見なしたことの理由があり，「繊細の精神」に基づく哲学こそを「真」の哲学として認めようとしたことの根拠があるように思える。

してみると，「自己」と「他者」との全面的対応に直接かかわる「直感」(sentiment) ないし「繊細の精神」は，単なる「感官」を通じての「事物」への接触という意味を越えて，きわめて重い内容をもつものと言わなければならない。そこでは人がそのすべてを賭けてじかに「他者」にかかわるという点で，その人自身の在り様がまぎれもなく問い糺されることになるであろうから。「繊細の精神」の背後には人間の生き方のすべてがひそみ，それが「他者」との全面的対応の中で逃れようもなくあらわにされることになるのだから。またこのように見る限り，パスカルの「繊細の精神」についての考え方は「感

性」に対する伝統的見方に根本的変革を迫るものであり，不当に蔑まれて来た「感性」に正当な位置付けを要求するものでもあろう。そして，それはまた今日に生きる我々にとって，依然問題としての意味を失っていないと言うことができる。

最後に以上すべての考察を通じ，パスカルの「繊細の精神」についてのまとめを与えたい。パスカルの「繊細の精神」は「幾何学の精神」に対置され，「幾何学の精神」が「推理」による観念の展開を指向するのに対して，「直感」(sentiment)を通じて直接具体的事物にかかわるものである。ただし，ここにいわゆる「直感」は単なる「感覚」による事物への接触を指すものでなく，我々と他の存在者との全面的対応の地平を開くものであった。従って，さきに具体的事物と言われたものは，もっと積極的に我々とは別個の他の存在者即ち「他者」を指すことになり，それに対して我々自身は「自己」と規定される。そして，人が自己のすべてを以て他者に向う時，その特殊的存在者はその特殊性のままに内側から開示され，人はそのものとの内的完全一致（把握）を求めて，そのものの奥深く分け入ることが可能になる。そしてこのような人間の機能が，とりも直さず「繊細の精神」と呼ばれたのであった。即ち，ここにそれが「繊細」と名付けられたことの根拠とともに，その「正しさ」の保証もまた見出せるのである。なお自己のすべてということはその全能力の開発を含むものであるから，この精神は「実践」と深くかかわり，その裏付けを得てはじめて機能すると言うことができる。してみると，「繊細の精神」によって開かれた場は妥協を許さない厳しいものであり，そこでは自己のすべてがまぎれもなくあらわにされるとともに，その在り方が常に鋭く詰問さらされる。しかし，そのような場をみずから引き受けその中ですべてを尽して生き抜いてこそ，人は自己自身を知るとともに，他者をもそれ自身として知ることが可能になるのである。そして，これは我々人間に否応なしに懸けられている「事実」であり，我々の生はそこにおいてはじまり，そこを離れて我々の生はあり得ない。ここにパスカルが「繊細の精神」をすべての基盤と想定した根拠があり，そこを離れた「哲学」が無意味であると考えた理由がある。そして，このことはそのまま「感性」の復権の主張でもあった。だが一方，「繊細の精神」と「幾何学の精神」の相容れない対立の指摘があり，ここには観念が事実に依存すべきであるにもかかわらず，みずからのメカニズムによって事実を離れ，事実と否応なく遊離して行く事態についてのパスカルの深い洞察があったと見ることができる。彼は厳しく重いこの「事実」がすべての基礎であることを認め，みずから身を以てそのことを立証しようとしたが，そうしようと努めれば努めるほど「事実」と「観念」との深い断層を痛切に知らされざるを得なかったのである。

おわりに

パスカルの「繊細の精神」についての所説は，数学者，物理学者としての彼にも一貫するその実証的態度との深い関連を思わしめる。ありのままの事実から出発し身を以て証明すること，それが終始変らない彼の態度であった。「繊細の精神」についての所説がその例外でないのは，そこでは「自己」と「他者」との全面的対応という「事実」から考察がはじめられており，しかもこの「事実」はパスカルによって身を以て生きられているからである。パスカル自身その「事実」を引き受け，その中で苦闘し，この「自己」と「他者」との否応ない関係の中で誰よりも鋭敏にその「繊細の精神」を錬磨したのである。かくてみずからをすぐれた「繊細の精神」の持主とした上で，この所説が成立している点に比類のない特色が見出せる。その意味でそれは単なる所説というよりも，絶えざる努力に支えられた彼自身の生の軌跡であると見なす方が適当であろう。そこでは，身を以ての実証に裏付けられない言葉は一つも語られていないと言って過言ではない。その点において彼の思想はすべて彼自身の実践の課題であり，観念の遊びを許さない厳しさの中に位置付けられる。そしてまた彼に懸けられた「事実」は今日といえども不変なものである限り，彼の課題は等しく我

々自身の課題であり，我々自身の身を以ての対応を絶えず要求し続けるものと言うことができよう。彼自身の比類のない厳格な実践によって我々を鞭打ちつつ。しかもこのような徹底した実証的態度に裏付けられた「繊細の精神」についての所説が，結果として「感性」に対する考え方の全面的変革をうながすことになったのはきわめて興味深い。

しかしながら一方，パスカルの徹底した実証的態度は，かえって他のいずれの場合よりも明らかに,「実証不可能なもの」をあらわにする結果をもたらしたことは注目にあたいする。実証に徹すれば徹するほど，実証不可能なもの，即ち彼自身の能力を超えたもの，ひいては人間の力を超えたものに，いよいよ明確に行き当らざるを得なかったのである。「繊細の精神」の場合についても，「自己」と「他者」との全面的対応という人知を超えた「事実」の中にそれは暗示されているし，またこの精神と「幾何学の精神」との対立ということも一つの解き難い謎の中に置かれていると言わなければならない。この点において「繊細の精神」についての所説も，とりわけて実証的特質をもつものでありながら，究極において「パンセ」全篇の主題である「人間を超えたもの」の方へと向けられていると言うことができよう。いずれにしても，パスカルのすぐれた実証性は同時に実証の外に置かれたものをいよいよ鮮明にし，実証性の中にあって我々の実践を鋭く要請する問題とともに，我々に懸けられた根本的謎として，これら諸問題をも否応なしに突きつけてくるものと言うことができる。

〔註〕

1) Léon Brunschvicg
2) 数字は Brunschvicg によって各断章に付されたものによる。
3) ≪on voit les principes à plein.≫
4) しかも「よい目」(bonne vue)という表現が与えられている。
5) 引用の後の数字は各断章の番号を示す。
6) 断章1における「原理」という言葉に対するパスカルの論述の不明確さについてはすでに述べたが，当然のことながらこの断章においては，この言葉と密接なかかわりをもつ「推理」ないし「推理する」という言葉についても，同様な傾向が見られる。「原理」の場合と同様，これについても断章3に至ってはじめて規定は明確になっている。この点に関しては，後に述べる機会があろうかと思われる。
7) その他≪d'une seul vue≫(1),≪d'une vue≫(3)など,類似の表現はすべて「繊細の精神」にかかわる規定である。
8) 「正確の精神」の特性を示す「正しさ」(droiture) という言葉には,「直接性」ということがとりわけ含意されている。
9) この場合≪sentiment≫という言葉は直前の≪sentir≫を受けてのことであるから,「直感」よりは「感じ」という訳が適切であろう。勿論「直感」と言い「感じ」と言っても内容的に変化が与えられたわけではない。
10) パスカルは断章2において「幾何学の精神」の性格を「広さ」(amplitude)と規定している。
11) ここにいわゆる「空間」,「時間」,「運動」,「数」などの「第一原理」,および「空間が三次元であること」などの認識を「直感」によるとすることは，さきに個々の具体的事物に直接かかわることを「直感」としたことと齟齬するように思われるかも知れない。だがこれらについての把握は,「推理」によることなく個々の具体的事物や事態を介した上で，直接生じるものであるからそのことは成立しない。
12) 従ってこの場合,「他者」は「人」でも「物」でもかまわない。森有正氏は「繊細の精神」をとりわけて人間関係の場合に適合されているようであるが。(筑摩書房刊「デカルトとパスカル」参照)